学術集会報告

【第３回学会賞受賞演題】

医学生は家庭医療コースの結果どのように変わるのか?

麦谷歩[*1]　武者幸樹子[*1]　喜瀬守人[*1]　亀谷学[*1]　岡田唯男[*2]

[*1] 川崎市立多摩病院　総合診療科

[*2] 鉄蕉会　亀田ファミリークリニック館山

キーワード　家庭医療　卒前教育

要旨

今回我々は，去る5月31日に催された第23回日本家庭医療学会学術集会に於いて，第3回日本家庭医療学会学会賞を頂いたため，ここに報告する．受賞演題の抄録は以下の通りである．詳細な内容は，今後この内容にさらなる研究を加えて論文としての発表を予定しており，今回この場で掲載することは控えさせて頂く．尚，発表内容の詳細は http://www.scribd.com/doc/3409700/3 に一般公開している. 興味のある方は参照されたい.

【目的】

聖マリアンナ医科大学では医学部第4学年の選択科目に「家庭医療」という科目を設けている．この講義を受講することで，家庭医療に対するイメージや理解がどのように変化するかを検討した.

【方法】

2007年に講義を受講した10名を対象に，全12回の講義を行い，講義前後に質問紙による調査を実施し比較した．分析は，1つは受講前後の家庭医療，プライマリ・ケア，総合診療に対してのイメージの変化を質的に評価し，もう1つは症例5件を呈示し，それぞれに関わるべき専門医を列挙させ，必要と考える専門医として家庭医を挙げる割合が増加するかどうかを統計学的に検定した.

【結果】

イメージに関する回答で，受講後は家庭医療を特徴づける言葉が増加した．また呈示した症例について家庭医が関わるべきと考える学生が大幅に増加し，必要と考えられる診療科の数の平均が減少した.

【結論】

この講義は，家庭医療のイメージを変化させ，家庭医療の具体的イメージの獲得に寄与し，学生は家庭医療の診療範囲，能力を正しく認識できたと考えられた.

感想

学会賞を受賞しての感想を述べるとしたら一言,「嬉しい，応募して良かった」に尽きる. 当初は一般演題として発表を予定していたが，共同研究者の薦めで急遽学会賞候補に応募することになった．候補演題は我々のもの含めて全部で4題とやや寂しい状況で，講評ではこのままの内容で雑誌に受理されるのは難しいだろうとのコメントを頂いたが，我々の発表が研究としての骨子が最

も整っていたということで，学会賞に選ばれたようだ．

準備段階では共同研究者が多施設に所属していることもあり，なかなか全員で集まることができず，Skype や google ドキュメントといった web ツールを駆使して仕上げていった．それでも最後は何度かリハーサルを行い，様々な角度から貴重な意見を頂き，スライドの見せ方の細かい修正に夜遅くまでかかったりした．

当日，そんな仲間たちは現場の病棟・外来業務に追われて発表に駆けつけられなかった者が多かったのだが，それでも数人が発表を見守ってくれたことはとても心強かった．発表はやはり緊張した．緊張すると早口になる癖があり，そうならないよう心掛けたところ逆にゆっくりしゃべり過ぎてしまい，発表時間を 2 分近くもオーバーしてしまった．もともと普段のしゃべりが遅いからさほど気をつけなくていいと言われていたのだが……質疑応答では，緊張のせいか余計なこともしゃべってしまったようだが，終わった時にはとにかく達成感があり，受賞の発表時は共同研究者らと声を上げて喜びあった．周りの人からの祝福もとても嬉しかった．

学会賞は評価されることが前提としてある．その前提があるとやはりやる気のモチベーションはぐっと上がり，よりよいものになるよう共同研究者らと協力し合うことができた．さらに今回幸運にも賞を頂くことができ，また次のやる気に繋がっている．この賞は応募しなければ候補になり得ないので，若手（40 歳未満）学会員の方々には，次へのステップアップのためにも是非応募を呼びかけたい．

今後はこの研究成果を基に対象者にフォーカスグループインタビューを行い，長期的追跡を含めて論文として発表する予定でいる．質の良いものが発表できるよう皆で努力したい．